様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　元 年　 ６ 月 ２３ 日現在

機関番号：１４３０１
研究種目：研究活動スタート支援
研究期間：2017～2018
課題番号：１７Ｈ０６７７４

研究課題名（和文）メルロ＝ポンティ中期思想を手がかりとした哲学と人間科学の学際的協働可能性の探求

研究課題名（英文）Inquiry into the Possibility of Interdisciplinary Collaboration between Philosophy and Human Sciences according to Merleau-Ponty's Middle Period Thought

研究代表者
佐野　泰之（Sano, Yasuyuki）

京都大学・人間・環境学研究科・特定助教

研究者番号：７０８０８８５７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　700,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、近年刊行されたコレージュ・ド・フランス講義に関する新資料などを手がかりに、1940年代後半から50年代前半にかけてのメルロ=ポンティの思想を再構成し、それを踏まえてメルロ=ポンティの思想の全体像を描き直すことを試みた。その成果は書籍『身体の黒魔術、言語の白魔術――メルロ=ポンティにおける言語と実存』（ナカニシヤ出版、2019年）として発表した。
また、上記の研究の成果を手がかりに、今日と学問と高等教育において哲学が果たしうる役割についての考察を行なった。

研究成果の学術的意義や社会的意義
専門分化が進行した今日の学問の状況において、哲学の役割もまた再考を迫られている。哲学は諸学の基礎の探究であると言われた時代があったが、今日では哲学そのものが一つのディシプリンと化し、分野や学問の外部との交流を欠いた閉鎖的な研究に従事する傾向がある。
そのような状況下で、本研究はメルロ=ポンティの思想を手がかりに学問全体、さらには社会全体の中における哲学の意義と役割を問い直すという作業を通して、今日における哲学の新しいあり方を模索し、提言していく試みへと通じている。

研究成果の概要（英文）：In this inquiry, I sought to reconstruct Merleau-Ponty's thought from the late 1940s to the early half of the 1950s, based on new material from the lectures of the College de France. Drawing from these materials that have been published in recent years, I redrew the entire picture of Merleau-Ponty's ideas. The result has been published as the book Black Magic of the Body, White Magic of Language: Language and Existence in Merleau-Ponty (Nakanishiya, 2019).
In addition, I have produced a study on the role that philosophy can play in today's science and higher education, using the results of the research described above as an indication of those possibilities.

研究分野：哲学・倫理学

キーワード：メルロ=ポンティ　現象学　文学　人間科学　ヴァレリー　スタンダール　言語　学際性

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９、ＣＫ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

メルロ=ポンティの思想は、当初はフッサールの現象学やハイデガーの存在論との関係という観点から主に研究が進められ、G. B. Madison, *La phénoménologie de Merleau-Ponty* (Klincksieck, 1973) や R. Barbaras, *De l'être du phénomène* (Millon, 1991) といった影響力ある先行研究によって、メルロ=ポンティの思想を初期の主著『知覚の現象学』における身体や知覚の現象学的記述から晩年の遺稿『見えるものと見えないもの』における肉の存在論への深化の過程として描く解釈が主要な解釈の筋書きとして提示された。しかし、1980 年代末頃から彼がパリ大学やコレージュ・ド・フランスで実施した講義の資料が刊行され始めたことで、〈知覚の現象学から肉の存在論へ〉という表向きの思想の発展過程の背後で彼が行なっていた、人間科学や芸術といった多様な諸分野との地道な対話の作業の内実が明らかになり、それらに注目した研究が徐々に進められることで、上記の解釈の筋書きは徐々に問い直されつつある。とりわけ、1940 年代後半から 50 年代前半にかけてのいわゆる「中期」と呼ばれる時期にメルロ=ポンティが主に論じている「表現」や「言語」といった主題は、専らそれらが晩年の『見えるものと見えないもの』の議論へとどのように展開されていくのかといった関心から読まれることが多く、メルロ=ポンティの中期思想そのものが有する独創性、ならびに中期思想がメルロ=ポンティの思想全体の中で占める地位を直接的かつ主題的に検討する試みはあまりなされてこなかった。それゆえ、メルロ=ポンティの中期思想を、彼が当時参照していた人間科学や芸術の背景まで遡って再構成し、そこから出発してメルロ=ポンティの思想全体を再解釈することが必要とされているように思われた。

また、人間科学の哲学的批判を通して哲学の諸問題を刷新するという、メルロ=ポンティが中期思想の中で行なっている作業は、専門分化が進行した今日の学問や高等教育の制度の中で哲学が一つのディシプリンとしての枠を超えてどのような役割を果たしうるかという問題について、一つのモデルとなりうるような実践例を提供しているように思われた。

２．研究の目的

本研究の目的は、（１）1950 年代前半に実施されたコレージュ・ド・フランス講義などに関する近年刊行された新資料の内容を踏まえてメルロ=ポンティの中期思想を再構成し、そこから出発して、『知覚の現象学』と『見えるものと見えないもの』に注目する従来の研究が依拠していた「現象学」や「存在論」といった純哲学的観点とは異なる観点からメルロ=ポンティの思想の全体像を描き直すこと、そして、（２）その成果を手がかりとして、今日における哲学の可能性を問い直すことである。

３．研究の方法

1940 年代後半から 50 年代後半にかけてメルロ=ポンティが執筆したテクスト、とりわけ近年刊行された講義準備ノートを、メルロ=ポンティがその中で参照している人間科学や芸術の議論に遡って読解する。また、今日の学問と高等教育の状況に関するサーヴェイを行ない、それを上記のメルロ=ポンティ研究の成果と突き合わせることで、メルロ=ポンティの思想のアクチュアリティを探究する。

４．研究成果

研究を開始した当初は、メルロ=ポンティが中期に行なっている人間科学との対話こそが彼の思想の意義と独自性を示す鍵であるという見通しのもとで、メルロ=ポンティと人間科学の関係を明らかにすることを目指して研究を進めていた。しかし、2013 年に刊行された書籍『言語の文学的用法の研究』に収録された、コレージュ・ド・フランス講義「言語の文学的用法の研究」の準備ノートの読解作業を進めるうちに、メルロ=ポンティの思想を「現象学」や「存在論」といった従来的観点とは別の観点から理解するための鍵は彼の文学論のうちに見出されるという着想を得た。それゆえ、人間科学と軸とする当初の研究計画を変更して、文学論を中心としてメルロ=ポンティの思想の全体像を描き直すという方向に研究計画を変更した。その結果、当初の計画の中心にあった「学際性」をめぐる考察の代わりに、人間の「自己形成」をめぐる考察が前景化することになった。

この経緯をより詳細に説明すれば、以下のようになる。メルロ=ポンティは「言語の文学的用法の研究」講義の準備ノートの中で、ポール・ヴァレリーとスタンダールという二人の作家を取り上げ、彼らがともに青年期に恋愛や創作活動の中で人間存在の両義性に由来する実存的葛藤に直面し、それを文学実践を通して徐々に克服していったと論じている。メルロ=ポンティによれば、ヴァレリーとスタンダールは、長年に渡る「言葉の修行」を通して文学的発話の能力を獲得した。そして、彼らがそのような能力を獲得していく過程は、同時に彼ら自身の実存を変革していく過程でもあり、このような実存変革こそが彼らが直面していた実存的葛藤を解く鍵となった。さらに、このことを踏まえて初期の主著である『行動の構造』と『知覚の現象学』を読み返すと、発話の能力の獲得を通した実存の変革、すなわち主体の「自己形成」という着想は文学論の中で唐突に現れたわけではなく、初期から彼の思想に伏流し、彼の思想を方向づけていたということがわかる。この点は、「現象学」や「存在論」といった観点からメルロ=ポンティを読み解こうとする従来の研究がほとんど触れてこなかった点であり、それゆえメルロ=ポンティの文学論の詳細な読解に依拠して、彼の思想全体を「自己形成」という観点

から体系的に再構成することは極めて興味深い作業であるように思われた。

ここから「人間科学」という主題に代わって「文学」という問題が本研究の中心な地位を占めるようになる。とはいえ、それによってこれまで遂行してきた人間科学に関する研究が無駄になったわけではない。たとえばメルロ=ポンティが参照していた生理学や心理学の議論に関する研究は、『行動の構造』における、ゲシュタルト心理学の立場に基づく機械論的生理学批判のうちに、のちの文学論における「自己形成」の問題につながる実存の「統合」の問題を見出すための手がかりとなった。さらに、メルロ=ポンティがソシュールの「後継者」とみなしている言語学者ギュスターヴ・ギヨームの言語理論についての研究から得た、言語活動を記号を形成する「行為」とみなす着想は、メルロ=ポンティの言語論に関するこれまでの研究を、文学そのものを「実践」の一種とみなす彼の文学論と結びつけることを容易にしてくれた。

以上の成果は、研究の進展に応じて論文や口頭発表という形で発表したうえで、最終的には当初の研究計画通り、メルロ=ポンティの思想を扱ったモノグラフ『身体の黒魔術、言語の白魔術――メルロ=ポンティにおける言語と実存』（ナカニシヤ出版、2019 年）にまとめ、刊行した。また文学論を読み解くことで明らかになった、実存の「統合」や「生き方」としての哲学といった論点を手がかりに、今日の高等教育のあり方やそこにおける哲学の役割についての考察を含む発表（京都大学文学部日本哲学史専修主催のワークショップ「日本哲学研究のオルタナティブ――若手研究者の新しいキャリアと哲学の可能性」における発表「哲学研究者にとって FD とは何か？――学際系学部出身の一哲学研究者の体験から」、および九州大学基幹教育院次世代型大学教育開発センター主催のリベラルサイエンス教育開発 FD「これからの教養教育・学際教育を考える――先進事例と共に」における発表「総人／人環における学際教育推進の課題と展望」）を行ない、本研究を教育学や学問論へと応用していくための見通しを示した。

加えて、メルロ=ポンティの文学論に関する上記の研究成果の一部は、『言語の文学的用法の研究』の編者の一人であるベネデッタ・ザッカレッロ氏の来日に合わせて東京大学で開催された研究会 Merleau-Ponty devant Valery において « La double metamorphose du corps chez l’ecrivain, selon le cours de Merleau-Ponty au College de France, 1953 » のタイトルでフランス語でも発表する機会を得た。この発表は東京大学の紀要に投稿予定であり、それによって研究成果を国際的にも発信することができるだろう。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計 1 件）

① 佐野泰之、「身体の黒魔術、言語の白魔術――メルロ=ポンティ「言語の文学的用法の研究」講義におけるヴァレリー読解をめぐって」、『立命館大学人文科学研究所紀要』、第 114 号、3-32 頁

〔学会発表〕（計 9 件）

① Yasuyuki SANO, « La double metamorphose du corps chez l’ecrivain, selon le cours de Merleau-Ponty au College de France, 1953 », Merleau-Ponty devant Valery, 2019 年 3 月 27 日（日本、東京大学）
② 佐野泰之、「総人／人環における学際教育推進の課題と展望」、リベラルサイエンス教育開発 FD「これからの教養教育・学際教育を考える――先進事例と共に」、2019 年 2 月 7 日（九州大学基幹教育院次世代型大学教育開発センター）
③ 佐野泰之、「哲学研究者にとって FD とは何か？――学際系学部出身の一哲学研究者の体験から」、ワークショップ「日本哲学研究のオルタナティブ――若手研究者の新しいキャリアと哲学の可能性」、2018 年 11 月 23 日（京都大学）
④ 佐野泰之、「語りえぬものを語る言葉――メルロ=ポンティと超越論的言語の問題」、ハイデガーフォーラム第 13 回大会、2018 年 9 月 15 日（早稲田大学）
⑤ 佐野泰之、「「言語の文学的用法の研究」の射程――メルロ＝ポンティのヴァレリー読解とスタンダール読解が示すもの」、日本メルロ=ポンティサークル第 24 回研究大会シンポジウム、2018 年 9 月 9 日（立命館大学）
⑥ 佐野泰之、川崎唯史、「メルロ＝ポンティとボーヴォワールにおける道徳――文学の問題を手がかりに」、日仏女性研究学会交流セミナー、2018 年 6 月 9 日（東京ウィメンズプラザ）
⑦ 佐野泰之、「ギュスターヴ・ギヨームと言語の現象学」、京都言語学コロキアム、2018 年 2 月 24 日（京都大学）
⑧ 佐野泰之、萩原広道、真鍋公希、谷川嘉浩、杉谷和哉、須田智晴、近藤望、「学際性を養成するプレ FD――京都大学大学院人間・環境学研究科における院生発案型プレ FD「総人のミカタ」をめぐって」、大学教育学会 2017 年度課題研究集会、2017 年 12 月 2 日（関西国際大学）
⑨ 佐野泰之、「スタンダールと愛の誠実さ――メルロ=ポンティ「言語の文学的用法の研究」講義におけるスタンダール読解をめぐって」、メルロ=ポンティ哲学研究会・キックオフミーティング兼研究会、2017 年 9 月 1 日（立教大学）

〔図書〕（計 3 件）

① 佐野泰之、『身体の黒魔術、言語の黒魔術――メルロ=ポンティにおける言語と実存』、ナカニシヤ出版、2019 年、367 頁
② 佐野泰之、「言葉と世界」、戸田剛文編、『今からはじめる哲学入門』、京都大学学術出版会、2019 年、153-183 頁
③ 佐野泰之、「「言語の文学的用法の研究」――書くことと生きること」、松葉祥一、本郷均、廣瀬浩司編、『メルロ=ポンティ読本』、法政大学出版局、2018 年、256-266 頁

〔産業財産権〕

○出願状況（計　　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年：
国内外の別：

○取得状況（計　　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

６．研究組織

(1)研究分担者

研究分担者氏名：佐野　泰之

ローマ字氏名：（SANO Yasuyuki）

所属研究機関名：京都大学

部局名：大学院人間・環境学研究科

職名：特定助教

研究者番号（8 桁）：70808857

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。